

特集 4

島根県で「炭焼き」をしていた在日韓国・朝鮮人

—その形成過程と衰退—

安 錦珠

要 約

本稿では、山村が多い島根県で朝鮮人労働者が「炭焼夫」になっていく過程とその後の変貌について論じた。島根県では、1920年代以降、山口—益田—浜田間の鉄道工事など土木建設に従事する朝鮮人労働者が増え、石見地方や鹿足郡の山口線に沿った地域に集住した。戦時体制下では、県内の炭坑やダム建設に強制連行された。そして戦時下での燃料不足の供給として木炭製炭が奨励されたことで、朝鮮人が木炭製炭業へ参入し、「焼子」に従事する朝鮮人も増えた。当時の木炭製炭は朝鮮人が多くを担っていたのである。敗戦直後、朝鮮人の帰国で木炭生産量は減少し、一時期好況も迎えたが、1950年代のエネルギー政策の変化で木炭製炭は衰退した。

キーワード：炭焼き・朝鮮人・島根県

I. はじめに

現在、島根県の人口密度は96.9人/km²で、全国43位の山村が多い地方である。1940年までの島根県は1市(松江市)13郡の都市部が少ない県で¹⁾、その後も過疎化が著しく進む地域である。

その島根県に、1940年に7,146人だった県内在住の朝鮮人は、1942年に9,863人に増え [内藤,1989:28]、1945年度には1万3,646人と推定される朝鮮人がいた²⁾。

広島に在住していることで日頃から被爆者と交流を持っていた筆者は、被爆者で韓国に帰った崔榮順(チェ・ヨンスン)さん³⁾や昨年死去された在日韓国人被爆者である李鍾根(イ・チョンゲン)さん⁴⁾が島根県匹見町に住んでいたことで、島根県の「益田市市民活動養成塾」の代表である福原孝浩さんらと交流するようになった。そして島根県でも多くの朝鮮人がいたことを知った。

島根県にいた朝鮮人の話題になるたびに「炭焼夫」という単語が聞こえ

てくる。韓国生まれの筆者としてはあまり耳慣れない単語であったが、関心もわいてきて島根県で「炭焼き」をしていた朝鮮人の存在が知りたい、と思うようになった。その目的で資料に当たってみると、内藤正中氏が島根県における朝鮮人労働者について総体的な研究を『日本海地域の在日朝鮮人』（多賀出版）にまとめられていて、「炭焼き」をした朝鮮人についてもかなり言及されている。本稿では、その書を大いに参照しつつ、「炭焼き」をしていた朝鮮人について焦点を当て、木炭製炭業に従事するようになった過程やその後の変貌を追う。

まずは、島根県における「炭焼き」の状況について概観する。3節では、島根県における戦前と戦後の朝鮮人労働者が携わってきた仕事全般について触れ、とくに朝鮮人が多く居住していた地域における朝鮮人の就労状況について述べた。4節では、「炭焼き」をしていた人のライフストーリーを付け加えた。

Ⅱ 島根県における製炭業

1 戦前

島根県は、森林を利用した産業が行なわれていて、製炭業は製鉄のタタラから発していたようで、その一端を『益田市史』の引用から垣間見ることができる。

美濃郡道川に、砂鉄のタタラは、おびただしい木炭を、消費したものであった。石炭の利用法を知らなかった当時に、溶鉄燃料として、木炭が珍重されたのは、今さら言うまでもない。けれども 当時の木炭は、ほんの粗製炭で間に合わせていた。木炭が今日の優良品となったのは、明治40年前後からである。(中略)

昭和のはじめには、木炭を作る町村が、県下で一九三、戸数にして一三〇〇余戸に及び、中でも益田町は、随一の存在とされた。それは全国にも稀な索道が、一八マイルも奥部の村々に延びて、森林地帯の匹見・道川と結び、盛にこれらの村から、木炭を益田駅へ搬出したからである。

(中略) 美濃木炭の声価は大いに高まり、神奈川県をはじめ、二府十一県の市場を確保した。[益田市史,1963:611-612]

島根県で木炭製炭が盛んに行なわれたのは昭和初期からで、石見地区の中でも美都郡と鹿足郡の両郡を「美鹿地方」として木炭の生産が著しかったようである。山陰線の完成で1923年には益田駅が東西に開通。更には

1924年4月の益田索道株式会社での営業開始に伴い、木炭・枕木・木材等の林産物を運搬する輸送方法も改善され、林業生産は飛躍的な伸びを示すことになった。1923年の木炭生産量は40万貫(1,500俵)だったのが、益田駅開通後の1928年には260万貫を生産し、その後1950年代まで年間200～300万貫の木炭を生産した〔益田市誌(下),1978:830〕。それまでは航路で搬出していたものが鉄道で搬出が可能になったことも大きな発展要因であった。

1930年から農業恐慌によって林産物の価格は停滞し、木材・木炭の林業関係者は非常な苦境に立たされ、1932年には「農山漁村経済更正計画」出して立ち直りを図るが、それほど進展はないまま日中戦争・太平洋戦争に突入した。戦時中ということもあり、石油燃料の不足から木炭の需要は益々必要となった。木炭自動車⁵⁾が国策として動き出したり、「1944年から島根県は『薪炭緊急増産施設助成要綱』によって、『半島労務者の内地移入』に県費助成の措置をとったこともあり」〔内藤,1989:185〕、多くの朝鮮人が製炭産業に参入し、1938年の美濃郡内木炭同業組合員は1,800余名で、2,000余の製炭業者がいた〔益田市史,1963:612-613〕。そして木炭生産量は増加した。

太平洋戦争中の林業は、用材・木炭・薪及び林野副産物の生産量の割り当てとその確保に重点がおかれ、植林なしの伐採が多く、美濃郡の山林は急速に禿山化した。1943年に島根県では大洪水となり、森林が禿山になったことでより大きな被害につながったともみている〔益田市誌(下),1978:826〕。

戦争末期には学徒戦時動員体制と徴用令で多くの人が軍需工場に動員されるが、島根県でも満州開拓団も含め⁶⁾、多くの人員をとられた。この時期、製炭業に関わる朝鮮人は1,200戸であった⁷⁾。

木炭の製造方法については、紙面の関係上、省略する⁸⁾。

2 戦後

敗戦直後、日本中でヤミの取り引きが流行する中、「美濃郡では昭和22年ごろ、一ヶ月平均10万束の薪炭が生産されたが」「美濃郡薪生産出荷組合の、正規なルートを経ないで、6割が闇に流され」た〔益田市史,1963:612-613〕。それは木炭生産量の減少にも原因がある。内藤はその最大原因を、「木炭を生産していた1200戸の半島人の約8割の帰還」であると指摘している⁹⁾。

島根県では、戦時中に「禿山」化した森林がより疲弊していくことを止

めるため、薪や木炭を配給し統制した。1948年には「造林促進要綱」を出し、薪は1949年8月に、木炭は1950年3月に制限が解除され、自由販売が出来るようになった〔益田市誌（下）,1978:826〕。

戦後の1950年代半ばまでは燃料不足のこともあり、製炭業は再び活気を見せたが¹⁰⁾、1958年頃までの生産量は横ばいに留まった。1955年にエネルギー政策が石油に転換され〔内藤,1989:187〕、1957年に鉄道の列車がディーゼルに切りかわり〔益田市史,1963:549〕、1960年代後半からは暖房用燃料は石油に、プロパンガスや電熱の使用も普及したことで一般家庭での木炭の需要はほとんどなく、1959年から木炭生産量は著しく落ちた。1962年の生産量は全盛期の3分の1となり、その以降は「斜陽産業」となった〔益田市史,1963:612-613〕。

表1 木炭製炭従事者と生産量

区分 年次別	製炭従事者			炭窯数			木炭生産量		
	総数	専業	兼業	総数	白炭	黒炭	総数	白炭	黒炭
	人	人	人	窯	窯	窯	t	t	t
1954	881	103	778	619	15	604	3,667	90	3,577
1956	1,339	667	672	663	—	663	3,574	—	3,574
1959	1,553	322	1,231	730	2	728	3,060	1	3,059
1962	523	33	490	541	—	541	1,249	1	1,248
1965	531	6	525	270	1	269	553	5	548
1968	158	4	154	155	—	155	464	—	464
1971	165	—	165	96	—	96	227	10	217
1974	36	—	36	26	—	26	122	—	122

（資料：島根県統計書から）（益田市誌 p.832）

表1を見ると、1971年以降、専業として営む人はいなくなり、165人いた兼業者は、1974年には165人から36人まで減少した。

3 現在

筆者は、現在の状況を知りたく、かつて「日本と朝鮮の生活を語る会」の代表として約20年間にわたって活動してこられた福原さんに現在の島根県での製炭業の状況について聞いた。彼は、「現在は木炭製炭業をしている人はいない。木炭ではなく、粉炭を製造している山本粉炭工業¹¹⁾がある」と言われた。「山本粉炭の社長は日本人で、残材や食品残渣で粉炭をつくる。

木炭とは全く関係がない」と付け加えた。そうであっても、本人から直接聞きたく、福原さんに同行してもらったうえで益田市美都町にある山本粉炭工業を訪問した。山本社長（80才）は、「1960年代まで島根県内で製炭に関わっていた朝鮮人の存在は知っているが、現在、製炭業に関わっている人はいないだろう。日本人もいないだろう」とのことだった [2023年9月4日聞き取り]。

Ⅲ 島根県の在日韓国・朝鮮人

前述のように島根県では東部の出雲地区、西部の石見地区に朝鮮人労働者が移入していたが、山口県に近い石見地区により多くの朝鮮人労働者が移入していた。島根県を取り巻く中国地方の各県との比較も交えて島根県の朝鮮人移入の特徴を見ることにする。

1 1930年代以前

1899年の勅令第352号で日本への就路は原則的禁止したが、1910年の「韓国併合」後、朝鮮人には不適用となった。日本は1919年に起きた3・1運動を機に朝鮮人統治政策を見直し、朝鮮人の内地への渡航を制限した。しかし、1920年の朝鮮半島における「産米増殖計画」は農民の離農離村を促進し内地への渡航が増加したことで、渡航制限を廃止し渡航自由性に変更した。1922年以降、内地渡航者は急増することになる。

島根県でも1920年には内地朝鮮人が524人まで増加した。表2の島根県内の朝鮮人移入者の多い地域を見ると、鹿足郡171人、阿賀郡197人、美濃郡125人である。島根県は朝鮮半島の関門である山口県に面しているが、大きな都会もなく山ばかりの県である。島根県での在住朝鮮人は1923年に78人と最低を記録し、1924年以降から徐々に増加することになる。

表2 島根県市都別在住朝鮮人の推移

(人)

年度	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1930	1934
松江市	—	1	2	1	1	2	2	2	3	4	4	38	87
八束郡	3	—	—	—	—	1	2	4	6	36	57	55	62
能義郡	1	2	1	2	—	—	1	4	9	12	26	26	82
仁多郡	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	29	447
大原郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	23
飯石郡	—	—	—	—	8	—	7	2	16	—	26	93	280

年度	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1930	1934
築川郡	3	2	3	4	3	4	14	4	19	—	18	38	105
安濃郡	4		1	12	—	3	5	9	23	19	25	60	91
瀬摩郡	5	2	4	3	6	6	7	3	7	61	14	47	111
邑智郡	22	20	7	1	3	3	6	31	34	—	16	132	420
那珂郡	12	25	29	197	95	32	19	46	69	—	142	247	469
美濃都	—	1	66	125	185	260	10	22	131	113	190	257	485
鹿足都	278	398	282	171	123	2	1	79	23	46	79	217	563
隠岐島	2	5	3	8	7	3	4	8	6	6	7	30	64
県計	330	457	398	524	431	316	78	214	346	297	604	1,311	3,289

(備考) 各年『島根県統計書』より作成、各年とも12月31日現在の居住者

(内藤 p.56 の表 2-1-2 より転載。)

(1930年で合計1,308と誤記があり、安訂正)

表2を見ると、山口県境の島根県西部の鹿足郡において1917年度にすでに300人近く在住朝鮮人がいて、鹿足郡東部の美濃郡と那珂郡にも徐々に在住朝鮮人が増えていく。この時期の在住朝鮮人の特徴の一つは、年齢が25才前後の単身出稼ぎであること、職業は土木建築業が圧倒的に多いということである〔内藤,1989:61〕。全国的にも土木建築業従事者比率が最多で全体の21.3%を占めていたが、山陰地方においては島根県83.8%、鳥取県89.3%で両県とも極端に土木建築業に集中していた〔内藤,1989:59〕。1921年9月の浜田駅開業、1923年12月の益田駅開業に関連して、山口—益田—浜田間の鉄道工事に従事したり、那珂郡と美濃郡海岸部の石見地方や鹿足郡の山口線に沿った地域にも集住していた。

一方、この時期の職業を見ると、土木建築業従事者だけでなく、鉱業の従事者やその関連業従事者も増加した。

2 戦時体制下以前の1930年代（～1937年）

世界大恐慌につづくさなかである1930年、日本国内の失業問題は深刻で、日本は朝鮮人の内地への渡航を阻止するが、「産業構造の最底辺に位置している特定の職種」における朝鮮人労働者の就業は増加した。1925年より増え続けた在住朝鮮人は、1930年代になると、邑智郡のほか島根県東部の飯石郡や仁多郡にも多く移入することになった。

1930年に江津—川戸間の三江線の鉄道工事が終わり¹²⁾、鉄道の開通後は、主要物産である材木や木炭の生産にかかわっていた石見地区西部の鹿足・美

濃・阿賀・邑智の4郡に6割が集中した〔内藤,1989:64〕。

内藤は、1930代における在住朝鮮人の市町村別の特徴を三つあげている。

島根県下171市町村のうち、昭和5年の国税調査時に朝鮮人が在住していなかったのは、大原郡東原町、簸川郡東村、同西浜村、同園村、邑智郡日貫村、隠岐島布施村の6町村だけであったから、県下全体にわたってくまなく朝鮮人が在住していたわけである。これが、1930年代における特徴の第1である。

第2には、山村に多数在住していることである。県下では最多数がいいたのは鹿足郡柿木村の168人、美濃郡都茂村の123人、邑智郡川越村の118人などであり、唯一の例外は101人の浜田町だけである。郡別でも美濃・鹿足・那珂・邑智の4郡が多く、その中でも山間部の村に多い。また出雲地方でも多数が存在しているのは山村がほとんどである。

第3には、そうした地域的分布状況にも関連して、職業別では林業関係従事者が最多数をしめる。とくに炭焼夫の320人は、土工の314人を抜いている。林業関係は473人であり、土木建築業356人、その他309人、運輸業226人、農業158人、商業155人、製造業80人、そして学校生徒81人に分けられる。10年前の大正9年(1920)の国勢調査では、土木建築業が圧倒的であったのに対比して、ここでは職業構成の多様化に特色がみられる。〔内藤,1989:65-70〕

つまり、内藤の言う島根県の在住朝鮮人の特徴をまとめてみると、「山村が多く都市部が少ない島根県全域の山村に朝鮮人が住み着いていて、朝鮮人の多くが炭焼きをしていた」ということである。

表3 1930年島根県市町村別在住朝鮮人 (人)

市・郡	計	男	女	町村	計	男	女
松江市	63	52	11				
八束郡	123	98	25	野波村	34	20	14
大原郡	116	81	35	日登村	81	57	24
飯石郡	161	121	40	来島村	41	30	11
安濃郡	158	116	42	大田町	52	35	17
				川合村	60	45	15

市・郡	計	男	女	町村	計	男	女
邑智郡	341	246	95	市木村	48	33	15
				川越村	118	86	32
那珂郡	485	335	150	浜田町	101	70	31
				石見村	41	32	9
				安城村	73	54	19
美濃郡	529	406	123	益田町	38	28	10
				都茂村	123	95	28
				二村村	18	14	4
				道川村	45	38	7
				匹見上村	97	63	34
				匹見下村	17	16	1
				豊田村	31	25	6
				高津町	44	30	14
鹿足郡	486	383	103	吉田村	32	28	4
				木部村	43	30	13
				日原村	57	46	11
				小川村	36	31	5
				柿木村	168	126	42
				七日市村	41	34	7
朝倉村	64	48	16				

(注) 昭和5年『国勢調査報告(島根県)』。(内藤正中前掲書 p66 より、安が郡単位で100人以上、村単位で30名以上を抜粋したものである。関連する地域も記載した。)

表4 1930年島根県在住朝鮮人の職業

(人)

	計	うち女		計	うち女
農業	158	7	作男作女	65	0
林業	473	29	炭焼夫	320	29
			林産物業主	74	0
製造業	80	4	煉瓦・瓦製造職	18	1
土木建築業	356	0	土工	314	0
			土木建築業主・請負業主	13	0
商業	155	10	露店商・行商人	100	2
運輸業	226	4	仲仕・荷扱夫	145	4

	計	うち女		計	うち女
その他	309	12	日傭	227	3

(内藤正中前掲書 p67 から抜粋)

表3を見ると、郡単位で一番多く在住朝鮮人がいたのは美濃郡で529人だが、村単位では鹿足郡柿木村が168人で最も多く、次いで美濃郡都茂村123人。そして邑智郡川越村と那珂郡浜田町が多い。美濃郡では都茂村だけでなく、匹見上村も多い。これらの地域の女性の占める割合を見ると、約3割である。

表4を見ると、この時期は林業とともに農業従事者が増加している。そして林業従事者の場合は女性が約1割を占めているのに比べ、その他の従事者では女性の存在がゼロに等しい。

表5は中国地方5県の農林従事者数である。島根県を除く他県では農業が林業より多い。島根県でも農業従事者が多くなっているが、他県に比べ林業従業者が約3倍で、炭焼夫も山口県や広島県より多い〔内藤,1989:70〕。山口県や広島県でも島根県境の中国山地で炭焼きが多く行われていたであろう¹³⁾。

表5 中国地方農林業従事者数（1930年）

(人)

	島根	鳥取	岡山	広島	山口
農業	158	199	602	586	1,296
林業	473	55	63	295	517
林産物業主	74	9	12	55	110
炭焼夫	320	42	50	202	281

(注) 内藤が「昭和5年各県国勢調査より作成」したもの (p70) の中から抜粋

朝鮮人労働者が増加するにつれ、朝鮮人関係団体も作られた。1930年には6団体の214人が加入し、1931年4団体194人、1932年5団体173人と減るが、翌年からは1933年8団体269人、1934年7団体818人、1935年6団体749人、1936年7団体780人と増えた〔内藤,1989:78-79〕。そして労務者に対して不当に賃金を貰えなかったことに対する賃金支払や賃金値上を要求し、要求が貫徹できない場合は、労働紛争も起こした¹⁴⁾。

3 戦時体制下（1938～1945）

内藤は、『『集団募集』『官斡旋』『徴用』によって強制連行された朝鮮人』と言っていて、本稿においても、内藤に因んで「集団募集」「官斡旋」「徴用」

全てを強制連行と位置づける [内藤,1989:21]。内藤によると、1939年から1945年までの6年間に強制連行された朝鮮人は「合計72万人以上」になると見ていて、「47%が石炭山に、9%が金属山に、14%が土建業に配置された」と言っている [内藤,1989:21]。

1940年からの強制連行計画達成率が日本全体で約6割だったことに比べ、島根県では約7割と高く、鳥取県はさらに高い8割以上を達成している [内藤,1989:104]。また内地在住朝鮮人の世帯人員調査を実施し、「内地同化」をすすめ、協和事業の一環として、内地人との結婚、朝鮮からの家族呼び寄せなど朝鮮人定住対策をすすめた。

この時期の職業を見ると、1940年度は鉱業がピークを迎え¹⁵⁾、島根県では邇摩郡の大森鉱山¹⁶⁾や簸川郡の鱒淵鉱山でも朝鮮人労働者を入れた。しかし「集団募集」で連れてきても2年の満期を迎えた退職帰郷者が続出したことで、労働力不足の解消にならず、1941年の太平洋戦争開幕とともに労働者移入政策を見直すことになった。1942年1月には「重要産業が必要とする『重筋労力の補充』については、朝鮮人労働者に依存する他はないとの見解を明らかにした」。そして、「国家権力が動員機関となって『官斡旋』による強制連行に踏み切るのである」 [内藤,1989:20]。

島根県では、1942年7月に美濃郡匹見下村の日本発送澁川発電所建設工事に400人承認され196人を連行してきたが、「到着後2週間を出でざるに、隊長以下33名逃亡したり」という報告が見られる¹⁷⁾。いかに強引に連行して来て過酷な作業に尽かせたかが想像しうるのである。逃亡者は島根県よりも鳥取県のほうが多かった。内藤によると、多くの人が逃亡後は「転職」していたようであった [内藤,1989:104]。連れてくる時の話に偽りが多く仕事も過酷だったため、賃金を貰えないまま逃亡し、帰るに帰れず他の仕事を探していたのであろう。そのほかにも1941年に簸川郡の鱒淵鉱山に30人計画で12人就業、仁多郡三沢村の中国配電新北原発電所工事には318人が就労した [内藤,1989:107]。そして都茂鉱山に96人、日立で150人の朝鮮人労働者が強制的に働かされた¹⁸⁾。

「官斡旋」の激化が進むが、その反動として脱走者も増え、1943年1月には196人連行者のうち89人と半分ちかく脱走者が出た。1944年2月には290人連行者のうち233人(8割)の人が脱走している。

織井青吾(ノンフィクション作家)は、慶尚北道安東から28才の時に連行された宋丙守の取材を続けながら、連行された経験のある数人の話を『いつか綿毛の帰り道』(筑摩書房)に綴っている。主人公の宋丙守は、「わしら

韓国人もみな日本天皇の子供なっちゃったけ……」と強引に教え込まれ、1943年に「見替り徴用」になって福岡県筑豊炭田の上山田炭坑に徴用された。しばらくは従順に働いたが、不平等な処遇と殴打に怒って逃亡し、福岡県北部芦屋で飛行場建設の飯場、下関、山口県小野田と転々する。朝鮮人がほとんどの工事建設現場に住みついても賃金を貰えないまま逃亡することを繰り返す。1944年には山口県大津郡油谷町の人丸で架線工事に土工として働き、そこからまた上山田炭坑から一緒に逃亡した3人のうちの1人に頼ることは出来ないかと思い、広島へ向かった。

その途中で出会った日本人から三次からさらに奥に入った島根県との県境にある高暮ダムを勧められ、宋丙守は1944年夏から‘自由労務者¹⁹⁾’として就労した。そこには‘集団さん’²⁰⁾が多くいて、自由労務者のなかには自分と同じく炭坑からの逃亡者が多いことを知る。また彼は山地で炭焼きをしていた人と出会い、親しい関係になった。その人を通じて宋丙守は山奥で炭焼きをしている朝鮮人らがいることを知った。またダム工事中にコンクリートの中に「人柱」²¹⁾となって死んだ人の話を聞き、またそこからも逃亡を企てる。炭焼夫の友人から広島県と島根県をまたがる山道を詳しく教えて貰って、逃亡に成功し、益田に入った²²⁾。

わしより三つ年下で、高暮の山なかでスミ焼きよるひとで、居昌邑（慶尚南道居昌郡）がコヤン（故郷）いう。はたちころ、日本きて仕事さしたが、ひどいめばっかりあうけ、スミヤキやりだしたいう……。高暮にゃ三十人くらいの韓国人おって、みなスミ焼いて暮らしちよったが、六貫（二十四キロ）俵で三十五銭か四十銭で売れるいうて聞いた……。[織井,1987:196]

「官斡旋」にも限界があることが明らかになり、1944年に「一般徴用制」²³⁾を実施することになる。そして前年の2倍以上の286,432人が徴用で強制連行され、6年間で72万人以上の朝鮮人を連行した[内藤,1989:21]。

島根県では、1991年、1996年、2001年の3回に渡って在日韓国・朝鮮人についてアンケート調査を行なっていて、3回目の調査報告書の中に、戦時体制下の時期に強制連行された朝鮮人の就労状況について以下のように書いている²⁴⁾。

島根県下では、簸川郡の鰐淵鉦山、仁多郡の新北原発電所、美濃郡の澄川発電所に就労させられたほか、安来の日立工場にも「半島訓練工」

として配属されました。「美濃郡の都茂鉱山には、朝鮮から郡単位で連行された80名と、各地から徴用された96名の名簿が発見公開されています。この時期には2万人以上の朝鮮人が島根県下全域に在住して、農林業、製炭業、土建業などで、戦時下の労働力不足を補うかたちで生活していました。[島根県,2002:2]

また島根県西部では、1943年9月19日から2日間の集中暴雨で「県全体では死者・行方不明500人以上に及び、明治以降現在に至るまで最大の人的被害をもたらした災害」²⁵⁾を受けるが、その復帰作業に朝鮮人が動員されていた²⁶⁾。

4 島根県下町村における朝鮮人

島根県の在住朝鮮人の職種は、表6を見ると、土木建築業よりも林業従事者が多く、そのうち炭焼夫が320人である。農業従事者も多くなっているが、表7を見ると、他県に比べると少なく、林業従業者の方が約3倍である。そのうち炭焼夫が320人で、広島202人、岡山50人、鳥取42人と比べて島根県が最も多い²⁷⁾。

表3では、島根県に在住朝鮮人が多いのは、村単位では鹿足郡柿木村が168人、美濃郡では都茂村123人、匹見上村97、邑智郡川越村が118人、那珂郡浜田町101人など島根県内に散在している。柿木村は山口県の県境である鹿足郡の山間地方で、美濃郡はその東部に位置していて、朝鮮人が多く在住していた都茂村は同じく匹見下村の北側である。山口県に比較的近くて瀬戸内海に面している広島県と日本海に面している島根県の中の中国山地の山奥に朝鮮人が多数いたのであった。

以下は、朝鮮人が多く在住していた美濃郡の都茂村と匹見村、そして鹿足郡柿木村とについてのことである。

(1) 美濃郡の朝鮮人

美濃郡は現在の益田市全域にあたる地域で、島根県内でもっとも多数の朝鮮人が在住していた地域である。

表3を見ると、美濃郡のなかでも都茂村と匹見上村に多かった。内藤は、その背景として、「都茂鉱山、大金鉱山などがあり、昭和12年(1937)の日中戦争の開幕とともに好況を迎え」た²⁸⁾ことをあげている。また「村民が村内では生活が困難であるといって離村したときに、(中略)町民が従事しようとしなかった劣悪な条件の仕事に朝鮮人が就業していたことを意味す

る」と指摘した〔内藤,1989:113〕。都茂村では、1930年から100人以上の朝鮮人が急に増え、1934年には40人以下に急減した²⁹⁾。

島根県では、1924年まで都茂・二川を経ての益田加計線（現在の191号線）の道路工事を行っていた。内藤は、その道路工事に朝鮮人が多く就労していて、「都茂村での工事が終わった後に二川村に移って」、「土木工事と炭焼きの焼子」になったのではないかと推測している〔内藤,1989:113-114〕。

林道がつき始めた昭和10年ごろには、急速に木炭ブームが起きていた。昭和の初め頃までは、炭焼きといえば、他県からの転入者によって営まれていた。彼等は焼子として技術を提供し、地元では資本をもって事業として取組むものがいた程度であった。企業制炭といていた。

昭和13年秋に妙蓮寺を宿泊講習会場にあて、青年壮年20余名が参加、……ようやく全村内で本格的な個人製炭が行われるようになった。反面、企業制炭は姿を消してしまった。（児高房夫『昭和の二川村物語』p.34以下）

1930年半ば頃からは、それまで製炭業の「企業制炭」運営方式から小資本でもできる「個人製炭」にかわり、朝鮮人が入りやすくなったのだろう。1938年秋には都茂村と二川村の境にある妙蓮寺³⁰⁾もその一役を担っていた。

土木工事で人夫として入村した朝鮮人は、山村でようやく本格的になってきた製炭業に焼子として、また林木搬出の木出し人夫になっていた。美都町では町内を縦貫する県道が改修され、県道につながる林道が開通したことにより、「急速な木炭ブーム」とともに山村に朝鮮人が多く炭焼き事業や焼子として働いていたのである〔内藤,1989:114〕。

中国山地で木炭にするための材木とできあがった木炭を搬出する仕事に従事していた経験を語る人は多い。しかし、林道が出来たといっても山奥で材木を背負って搬出するための道路まで出るとは重労働であった。前述の匹見町生まれの李鍾根さんも、「小学校の高学年になると、父の炭焼きを手伝うようになり」「1俵15キロもある炭俵を背負わされ、車が通る下の道まで急な山道を歩いて行かされ」「それは重たかったです」と、証言している

³¹⁾。

図1 美濃郡の各町村の地図 (1889年、1町20村)



(2) 鹿足郡柿木村の朝鮮人

図2 鹿足郡の各町村の地図 (1889年、1町11村)



鹿足郡柿木村は吉賀町の左上に位置していて、左上半分は津和野町に、左下半分は山口県に接している。1930年に柿木村では168人の朝鮮人が居住していて、島根県下で「最多数の朝鮮人がいた村」であった(男126/女42)。内藤はその背景として、「山陰線と郡内を貫通した山口線の鉄道工事が1923年の益田駅開通で終わった後、鉄道開通を機とする林業開発、薪炭業の発展に誘導されて、山村に居住するようになった」と言う[内藤,1989:116]。男女比からして女性が3分の1だということは、山村で炭焼き業を営むには家族ぐるみであったことで、飯場での仕事など女性の役割が大事であったに違いない。それだけ朝鮮人が集住していると、民族団体の活動も活性化し、黒淵には戦後早い時期に朝鮮人学校を開校された。

内藤によると、柿木村で「木炭」を職業としている人は、1937年の大字

椈谷で38人であるとし³²⁾、その人らが朝鮮人であるかどうかの確認はできなかったようである。そして、1942年の「協和会」の資料から、朝鮮人は「最下層の焼子として」従事していたことを指摘した。

また「柿木村村民税等級別人員の推移」を分析して朝鮮人の税納入が「戦争激化の1942年から1944年にかけての倍増、さらに1945年にかけて増加」していることを指摘し、「木炭生産が朝鮮人への依存を深めていく経過」を説明した〔内藤,1989:118〕。この時期から朝鮮人のなかで「階層分化が進んでいったようであった。

(3) その他

その他にも、広島県朝鮮人被爆者協議会編『白いチョゴリの被爆者』（労働旬報社）に、朴在寿は、広島から島根県仁多郡馬木村での1年余の逃走生活を記している。彼は芸備線に乗り山間部で朝鮮人が住んでいるところを乗客から聞き出し、出雲の山奥の馬木村小峠に入って炭焼きをしていたと証言している。そこでは「大阪から疎開していた朝鮮人家族15、6世帯がそれぞれ朝鮮人を雇い入れ、炭焼きをして」いて、雇い入れた人もふくめ100人前後の朝鮮人が住んでいたようである。焼いた炭は「出雲の三成の製鉄所に納入してい」たという。彼は炭焼きの仕事について次のことも証言している。

朝早く山に出かけ、日が暮れるまで木を伐採したり、運搬したり、スミを焼いたりして、なかなかの重労働でした。同じ朝鮮人同士でわりとくつろいだ面もありましたが、「今日、捕まるか」「明日は」などいつも不安にさいなまれてました。〔広島県朝鮮人被爆者協議会編,1983:149〕

炭焼きの仕事は「なかなか重労働」であったが、同じ朝鮮人に囲まれてくつろぐことで出来たという面もあり、山奥は逃亡者の隠れ処として適していたとも言えるだろう。また彼の証言からもあるように、島根県山奥は疎開先を持たない朝鮮人の疎開先としての役割も担っていた。

IV 柿木で「炭焼き」をする具性熙さん

鮮やかな紅葉が散り始めた西中国山地。その一角の鹿足郡柿木村で、在日韓国人一世の老夫婦が暮らしている。青春時代に祖国を離れ、夫は日本の近代化の礎となった石炭掘り、炭焼き、材木の切り出しに従事した

『朝日新聞(石見版)』の1997年12月5日から1997年12月11日までの「石見『在日一世』の87年 柿木村に生きる」という記事が7回に分けて連載されていて³³⁾。上記はその冒頭である。

以下は、その記事に沿ったライフストーリーである。

1 戦前その1 (島根県の柿木に来る前)

具性熙さん(1910～2007.12、当時87才)が生まれた忠清北道佳谷面は、「谷間にへばりつく40戸ばかりの農村だった」。

漢文学者で寺小屋を開いた父は、村で一番の土地持ちではあったが、耕作には適せぬ土地で、植民地になってからは「朝鮮漢文は不要」という雰囲気広がりが、失職した。そして40歳のころ職を求めて福岡県山田市の筑紫炭鉱に働きに出た。

父が不在なので、床暖房用のたき木拾いや稲作の仕事は、当時14歳だった長男の具さんがやらねばならなかった。母と3人の兄弟を養うため、農繁期には釜山近郊に出稼ぎにも出た。

19歳で、同村の李三変さん(当時83才)と結婚した。小学校は遠すぎて、二人とも義務教育を受けていない。「結婚後まもなく、筑紫炭鉱にいる父から手紙が来た」。「併合されたのだから日本と朝鮮は同じ国になった。いっそ、一家でこっちに来ないか」と。「自分の国籍は日本になっている。どうせ村の農業では食えないのだから」と思った。

1931年、20歳の具さんは母と弟、そして妹二人と福岡県の筑紫炭鉱に向かった。妻は1年遅れて来た。「祖国では日本が政治をしていて、朝鮮人にもいい仕事が当たるはずがない」と思った。

棟割りの長屋の二間の部屋で家族6人の暮らしが始まった。仕事は、地下100メートルでの石炭運搬係と決まった。具さんは、背負った竹かごに30キロの石炭を入れてもらい、50メートルほど先の1トン入りの箱まで運んだ。5～60人の運搬係はほとんどが朝鮮人だった。

午前7時から午後5時まで、昼食時を除いてひたすら往復を繰り返す。採炭は24時間二交代制だった。電灯に照らされた坑内には石炭粉がまい、帰宅すると頭中が真っ黒。鼻の下と身の回りが特に黒くなった。

一家の男3人が働き、それなりに貯金もできた4年後、地上の線路補修係だった弟が、台車から崩れ落ちた分厚い板と電信柱の間にはさまれたことで、2日間苦しみ抜いて死んだ。

弟の死が一家の大きな転機になった。具さんは、当時朝鮮人が多く就労していた職種を「朝鮮人の間の就労情報網」から知り得た。「鉄道工事、ダム建設、

鉾山労働……」の中から、「空気の綺麗な山で仕事ができる」と「炭焼き」を選んだ。そして家族を連れて下関市へ移った。

2 戦前その2 (島根県の柿木村で)

弟の死から半年後の1936年、鹿足郡六日市町に炭焼きに来た。なぜ六日市なのか、確かな記憶はないが、「知人のうわさ話を信じた」。

具さん夫婦は民家の小屋を借りた。そこでは、右足太もものできものがひどく膿み、歩けなくなった、具さんは日本人女医から「命の方が大切よ。お金はいつでもいいからね」と、麻痺なしで長さ15センチの切開手術治療してもらい、自分の空き家まで安く貸して貰った。「働けなかった三ヶ月ほどは百円の貯金で食いつないだ」。そして、炭焼きの資金にと韓国の田んぼ70アールを400円で売った。農協から200円を借り、六日市町河津と山口県にまたがる共有林の立ち木を500円で買った。5年の契約だった。「炭焼きの技術は日本人から習った」。

「六日市町で契約が切れ、柿木村が2カ所目の炭焼き場となった」。「契約期間は15年」。「契約の手付金20万円」で、「金は農協などが無利子で貸してくれた」。

「ここで炭焼きを始めたのは」、「1942年3月」。「炭一俵(15キロ)当たりコメ二合が特別に配給された」。「重労働ではあったが、炭焼きは在日朝鮮人にとって物不足時代の「花形産業」だった」。

具さんは5人の子どもの教育のために学校が近い村の中心部に自宅を買った。具さん宅には、次々と就労を志願する朝鮮人が訪れた。まじめそうな一家を採用し、当面の生活費として百円を無利子で貸し、「仕事をまかせ」た。

敗戦時の焼子は60世帯もいた。ほとんどが朝鮮人世帯で、日本人は3世帯だけだった。

仕事の内容は、まずのこぎりで雑木を切って、枝を打ち、切りそろえて炭窯に運ぶ。焼いている間も木を切る。ころ合いをみて余熱の残る窯から取り出す。積雪期にも焼くので、秋には大量の雑木を窯の近くに積んだ。夫婦が協力しないとできない。焼子一世帯が年に12回は焼いた。

その他の仕事としては、「近隣農家に炭俵や縄を発注し」、炭の買い取り先の会社や御し先の農協との打ち合わせ、三つの倉庫の管理、トラックへの積み込みの立ち会い、焼子不満の聞き役」もしていた。そして「トラックが持ってくる伝票を松江市にある政府の木炭事務所に持って行くと小切手をくれた。それを市内の日本銀行で金に変え」た。

「月に一万俵を焼いた」。「作れば、なんぼでも売れた」。具さんも焼子も「兵隊に行ったと思って頑張った」。「代金の1割を手数料でもらった」が、「身を粉にしての雑用代で暴利なんかじゃありませんよ」と言う。

具さんは「日本で生き抜く」と決意し、故郷の佳谷面に残っていた土地を売り、資金に充てた。

3 戦後

1945年8月15日、日本敗戦。「みんな働かなくなった。わしはもう、気がウルウルして落ち着かんかった」。「山にいた60世帯には、好きなようにしてくれと言った」。「残って炭を焼く人には今まで通り金を払う」。「朝鮮に帰る人は借金が残っていても棒引きにするが、焼いた炭は置いていくように」と言った。

「山に残ったのは二、三世帯だけだった。まもなく林道が開通し、炭の搬出が楽になった。すぐに焼子は元通りの約60世帯になった」。「戦後の食糧難で、大阪や中四国の都市から「コメの配給が付く」と、朝鮮人が集まってきた。

「一方、日本に留まった朝鮮人の民族意識が高まった」。「『解放』の2ヶ月後には在日朝鮮人連盟が結成され」、翌年の10月には、朝鮮半島が「実質的に」「分断された影響もあり、組織は二つに割れ」た。「炭焼き場も大きく揺れた」。県西部の人からは「日本人に協力したブローカーだ」と言い、具さんの生き方は「全否定」された。勝手に炭をトラックに積み、「持って帰ろうとするのでもみ合った」こともあった。

具さんは、最初は「自分は地主のように不労所得を得たのではない。身を粉にして働いた。世話をする人間がいなかったら、同胞も仕事ができなかった。応援し、助け合う気持ちでやってきた」と反論した。「だが、延々と続く追及に嫌気がさした」。「もう、あんたの世話にはならん」と、出て行く焼子もいた。「元々、争いごとが嫌いという具さんは戦後3年目に事実上、この柿木村黒淵での仕事から手を引いた」。

その後、津和野や日原など4カ所ほどで同じシステムの製炭を続けた。

日本に留まった朝鮮人の民族意識が高まり、1946年5月、約60世帯が住む柿木村黒淵の炭焼き集落に、「黒淵朝鮮学校」が開校した。3年半後の1949年11月、日本を占領中の連合軍司令部(GHQ)は学校の強制閉鎖を命じ、校舎や物品は県学務課の手で没収される。その半年後、朝鮮戦争が勃発した。

「1949年、政府の買入れ制限が始まると、木炭産業は衰退」した。「108

千トンあった57年度の県内の木炭生産量は10年後、16,400トンに激減した。具さんは「60年ごろ炭焼きの親方をやめ、買った立ち木の切り出しに転じ」るが、「パルプ、木材価格も低落し」「大阪で土建業をしていた旧知の焼子の元で力仕事をしたこともある」。「平成になるまで、働き詰めに働」き、生活費や子どもの学費に充てた。上の子どもが社会人になると、社会人になった子が下の子の学費を出してもらい、4男5女を育てた。「自分はもうけの全部を教育費につぎ込んだ」と言っている。

具さんは1990年に仕事をやめ、子どもたちがプレゼントしてくれた「白い外観に改築した自宅」で過ごしなが、「生活費は子らが出し合っ」ている。「40余年前、朝鮮民主主義人民共和国に渡った父母は亡くなり、同行した弟2人の消息ががすかに届く」ようである。

V まとめ

以上から、木炭産業に従事してきた島根県における在在朝鮮人の戦前から戦後の過程を見てきた。戦前の在在朝鮮人労働者の諸種網のなかで、島根県が他県と大きく異なるのは、木炭製炭業が大きな比重を占めていたことがわかる。その要因としては、まず島根県に森林が多いことが挙げられる。時代的背景として、日本が戦争遂行のための燃料供給の面において、石油や石炭だけでは事足りなかったことで、木炭製産を奨励していたことである。その過程で、多くの焼子が必要であったが、焼子の仕事は重労働で、戦争に駆り出された日本人だけでは間に合わず、朝鮮人に頼らざる得なくなり、朝鮮人焼子も増えていたのだろう。

朝鮮人労働者側からすると、島根県は、朝鮮半島から生計を繋げるために日本に渡る渡口の福岡や下関から比較的近く、朝鮮半島の農村出身の人々からすると、島根県での生活もあまり変わらない田舎生活であったのかも知れない。日本が「募集」「官斡旋」「強制徴用」の段階を経ての強制連行で連れて来られた人々の中では、契約期間が終わった人々の転職先になったり、強制連行での仕事が過酷さのあまり逃亡した人たちが、警察の視線から逃れるために都会よりも山奥の仕事を選択していた場合もあった。また都会の空襲をさけて疎開先のない朝鮮人は一家を挙げて山奥に疎開して焼子の仕事に就く場合もあった。しかし重労働の最下層の仕事にほかならなかった。

そして、日本の木炭製産の需要が大きくなるにつれ、島根県での木炭産業も「企業経営」から「個人経営」方式が多くなるにつれ、「木炭ブーム」のなかで、朝鮮人の木炭産業参入も容易になった。そうすると、朝鮮人の木炭親方のもとで働きたい朝鮮人焼子を志願する人は多くなった。石炭炭坑で契

約が満了した人や逃走した人々にとって、山奥での仕事は重労働であっても、「空気がよい」「朝鮮人に囲まれて気持ちが安らぐ」場であり、他の仕事よりは選好されていた職種であったのかもしれない。

一方、朝鮮人経営者が多数出現する過程で、朝鮮人社会のなかで階層分化も生じていた。早い時期に日本に移住し、家族ぐるみで、資本を持っている人の方が有利な位置に立ち、単身で強制連行され逃走生活で仕事を転々とする人との格差が生じていたのだろう。

終戦後、日本家庭用の燃料として再び好況を見せたが、1950年代のエネルギー政策の転換で木炭産業全体が衰退した。現在、島根県で木炭作りをしている人を見つけることはできなかった。それまで木炭製産に従事していた人は、具さんのように、出稼ぎに出るか転居せざる得ない。過疎化していく島根県では、日本人だけでなく朝鮮人の過疎化はより早く著しかったのではないだろうか。

本稿では、十分な資料をもとに書いたわけではないので、島根県全体の木炭産業に従事していた朝鮮人労働者について、新たなことを提示することはできなかった。地方における在日韓国・朝鮮人についての研究は看過しがちで、とくに山村で木炭製産に従事していた人々の記録はあまりに少ない。今後、より多くの資料と調査のもとに言及されるべきであろう。また在日朝鮮人の仕事において、単身者と家族ぐるみの階層分化にも注目し、女性の役割をも照射すべであることをつけ加えたい。

注

- 1) 戦前の3市である。浜田市が1940年に、出雲市が1941年に発足された。
- 2) 『中国新聞』1995年8月5日の記事には、「内藤正中の調べでは、1940年に7,146人だった県内在住の朝鮮人は、17年に9,803人に増えた。20年度には1万3,646人」とある。
- 3) 韓国の原爆被害者を救援する市民の会『ヒロシマへ……』(2019)、韓国語版(2020)は筆者が翻訳している。
- 4) Hiroshima Speaks OutのHPに証言者の一人として証言内容が記載されている。
- 5) ガソリン規制で国策として試作し、当地域では、1950年代前半まで走っていた。
- 6) 3つの形態—青年義勇軍、一般農民、県単位の報国農場。島根県では、昭和15年7、高津町の一部青年、昭和17、真砂村130人30戸、東仙道120人[益田市史,1963:504]。美鹿両郡では1944年4月に20名を先頭に、昭和1945年4月には150名が満州に開拓団として出発した[益田市誌(下),1978:664]。
- 7) 内藤は、『島根新聞』1,945円11月13日の記事を紹介している[内藤,1989:186]。

- 8) 立石憲利『おかやまの炭焼き』（2017、転倒工芸木炭製産技術保存）を参照されたい。島根県でも同じ方法を取られたかの確認できていない。
- 9) 『島根新聞』1945年11月13日 [内藤,1989:186]
- 10) 1958年12月の「貨物の動き」の統計を見ると、益田駅からの貨物の発送は17万3500トン、到着が13万3500トンで、米子鉄道管内では第一位で、品目を見ると、木材を筆頭に木炭・大和工場の化繊・鉱石・薪の順位である [益田市史,1963:547]。
- 11) 山本粉炭工業の創業者であり、代表取締役の山本明男さんは、1996年に会社を設立している。
- 12) 石見本駅までは1934年に開通することになる。
- 13) 在日韓国人被爆者である李鍾根さん一家は匹見町で炭焼きをしていたが、後に広島県吉和村に引っ越して、そちらでも炭焼きをされた。吉和村は島根県との県境で、匹見町とは山を挟んだ地域であった。
- 14) 内藤の調べによると、1930年11月から1931年6月までの間に、賃銭支払要求1件39人、賃銭値上要求2件71人、その他1件18人が、「労働紛議原因調」の中で報告されているが、『特高月報』にも掲載されていないので、内容の詳細を知ることはできなかったとしている。当時の無産運動は、日本農民組合—全国農民組合を大衆的な基盤にしていたようであった。 [内藤,1989:79-80]
- 15) 寺戸郁郎（前美都町町議）さんは、「1943年頃が鉱山経営のピークだった」と語っている。（『美都町における韓国・朝鮮人の戦中・戦後—実態調査報告書』（1996.5.19）の寺戸郁郎さんからの聞き取りの中で。報告書は「日本と朝鮮の生活を語る会」で、聞き取りし作成している。）
- 16) 大森鉱山では、虐待に反対して同盟罷業が起きたとことを『山陰新聞』（昭和14年12月）に報じている。
- 17) 『特高新聞』1942年7月
- 18) 都茂鉱山や日立での朝鮮人労働者数も内藤からの取材によると記している。（『中国新聞』1992年8月27日）
- 19) 織井は『いつか綿毛の帰る道』のなかの高暮ダムで働くことになった宋丙守が集団で連れてきた強制連行者らに対し、日本人は「集団」と呼び、朝鮮人労働者の間では「集団さん」と呼んでいたことを証言していて、筆者もその表現を用いた [織井,1987:189]
- 20) 「(注) 9」と同じく、織井は前書のなかで、日本人事務職員のあいだでは集団で連れて来られた強制連行者らに対しては「集団」と言い、そうでない労働者に対しては「自由労働者」と分けて呼んでいたようである。そして、事務職員は自由労働者を受け入れる際には、「いかなることがあろうとも、自由労働者であるおまえは彼等（「集団」の人々：筆者挿入）といっさい口をきくことはない」と注意を喚起させていた。 [織井,1987:188]
- 21) 高暮ダムは中国地方最大規模のダムで、1939年からダム工事が始まり終戦を挟んで約10年かけて工事が行われた。終戦前のダムで働いた人は約2000人以上で、朝鮮半島からも多くの人を連行してきた。ダム工事中は、堤高70メートルの上からすさまじい勢いでセメン

トを流し込んだが、その中になんかの人が生き埋めになったことで、「人柱」や「白骨ダム」と呼ばれたりもしていた。

- 22) 宋丙守は益田で軍の防空壕を掘る仕事に就いていた時期に終戦を迎え、上山田炭坑から一緒に逃げた人を案じて彼を探すために広島で2～3日を過ごしたのち、帰国を試みるが、船賃稼ぎにくれながら帰国船があるところを転々とする。けっきょく船賃が貯めることができず、また広島県境近くの島根県飯石郡飯南町の来島ダムで働くことになる。そしてダム工事の完成の少し前に高暮ダム近くの君田村の作男となり、余生を閉じた。
- 23) 内藤は「一般徴用制」と表現している。「徴用」には、「一般徴用」と「軍関係徴用」があり、「集団募集」「官斡旋」「徴用」全てが強制連行とする。内藤は、この時期の土建業以外は「一般徴用」によって行なわれたとしている [内藤,1989:20]。
- 24) 島根県『「多文化共生社会」のために～在日韓国・朝鮮人アンケート調査から～』2002,p.2
- 25) 全国では死者・行方不明 970 人、住家全壊・流失 9709 戸などとなっていたが、最も被害が大きかったのは島根県であった。中国建設弘済会「昭和 18 年 9 月台風」http://www.ccba.or.jp/archives/pdf/disaster_S18.9W.pdf (2023 年 9 月 30 日閲覧)
- 26) 「美都町における韓国・朝鮮人の戦中・戦後一実態調査報告書」(1996.5.19)の寺戸郁郎さんからの聞き取りの中で。
- 27) 内藤は中国 5 県の農林従事者数を比較して中国地方では島根県を除いて農業が林業より多いことを指摘している [内藤,1989:70: 表 2-3-4]。
- 28) 内藤は、『島根評論』を引用し、日中戦争の開戦とともに好況とともに「都茂鉱山・大金鉱山・豊昇鉱山の三つまでが併立して素晴らしい活気を呈」していたとしている(『島根評論』s 13 年 3 月号 p.109 : 内藤 p.115)。また、『都茂村統計』(美都町役場蔵)を引用して、都茂鉱山では 1919 年に第一次世界大戦に活況をみせ、その後、戦後休山していたが、1934 年に再開し、1938 年の朝鮮人は 30 人くらいで、戦争末期には朝鮮人が 100 人くらいいたとしている [内藤,1989:115]
- 29) 『都茂村統計』では 1930 年に 120 人、『国勢調査報告』では 123 人となる。そして、1935 年には 15 人となるが、1950 年には 166 人まで増えた(内藤 p113、表 2-5-1「都茂村の在住朝鮮人の推移」)。これについて内藤は、「人口面より見た本村の特色の 1 つであって、この存在が本村の経済形態に与えられている有形無形に大きなプラスとなる事は必然である」と、『都茂村経済の実態』(1949 年、都茂村発行)の資料を用いて説明している(内藤 p115)。
- 30) 現在の住所は美都町となっていて、朝鮮人と深く関わりを持っていた寺である。
- 31) Hiroshima speaks out 「李鍾根」< 2 幼少時代 > の中で。
- 32) 内藤は、柿木村に現存する資料のなかで、僅かに村会の会議録に記載している村民税務課の文書記録からの数字であるとし、その記録の中で、「木炭」を職業としている人の数字を示した。小字別では古江堂に 12 人、梶谷に 2 人、中河内に 19 人、白井に 1 人、黒淵に 5

人と計 39 人となり、本文で示した 38 人とは 1 人の差が生じている [内藤,1989:116-117]。
33) 三宅一志記者の集材による記事である。

文献

- 内藤正中,1989,『日本海地域の在日朝鮮人』多賀出版
 ———,1986,「日本海地域における在日朝鮮人の形成過程 (I)」島根大学法文学部『経済科学論集』11 卷,1986 年 3 月,pp.27-57
 織井青吾,1987,『いつか綿毛の帰り道』筑摩書房
 大川健祠,1975,「中国山村における『炭焼き』村の解体と再編—島根県邑智郡大和村の実態調査から—」『山形大学紀要』第 6 卷第 1 号,pp.51-89
 島根県,2002,『「多文化共生社会」のために～在日韓国・朝鮮人アンケート調査から～』
 立石憲利,2017,『おかやまの炭焼き』転倒工芸木炭製産技術保存会
 朴在寿,1979,「おまえらみたいな奴、三里でいくらでも手に入るんだ—逃亡生活・徴兵拒否のはてに」広島県朝鮮人被爆者協議会『白いチョゴリの被爆者』労働旬報社,pp.143-157
 韓国の原爆被害者を救援する市民の会,2019,『ヒロシマへ…』ひろしま女性学研究所,pp.13-59
 益田市,1963,『益田市史』
 ———,1978,『益田市誌』
 TSK 山陰中央テレビ,2023 年 9 月 27 日放送
 BS フジテレビ,2006,『智慧の輪ニッポン』2006 年 10 月 26 日放送
 Hiroshima Speaks Out の HP <李鍾根>
 日本と朝鮮の生活を語る会『美都町における韓国・朝鮮人の戦中・戦後—実態調査報告書』
 1996 年 5 月 19 日 (寺戸郁郎さんからの聞き取りの中で)
 『朝日新聞 (石見版)』1997 年 12 月 5 日～1997 年 12 月 11 日
 『中国新聞』1992 年 8 月 27 日
 『中国新聞』1995 年 8 月 5 日
 『中国新聞』1999 年 3 月 12 日
 ウィキペディア<美濃郡><鹿足郡> (2023 年 9 月 1 日閲覧)
 中国建設弘済会,「昭和 18 年 9 月台風」http://www.ccba.or.jp/archives/pdf/disaster_S18.9W.pdf (2023 年 9 月 30 日閲覧)

Abstract

This paper discusses the process by which Korean laborers in Shimane Prefecture become “charcoal burners,” and their subsequent transformation. In that mountainous prefecture,

from the 1920s onward, the engagement of Korean laborers increased in civil engineering and construction, such as railway construction between Yamaguchi, Masuda, and Hamada. Koreans began to settle in the Iwami region and Kanoashi County along the Yamaguchi Line. During the war, Koreans were forced to work in coal mines and dam construction in the prefecture. The Japanese government, in response to wartime fuel shortages, encouraged increased production of charcoal. As a result, the number of Korean laborers engaged in the profession known as yakiko, laborers of charcoal burning, increased. Koreans came to play a significant role in wood charcoal production. Following the post-war period and the repatriation of Koreans, the production of wood charcoal decreased. Although it enjoyed a brief period of prosperity, the wood charcoal industry declined in the 1950s due to changes in energy policies.

Key words: Charcoal Burning, Koreans, Shimane Prefecture

(あん・くんじゅ 社会理論・動態研究所)